

書 評

大和田 智文 著

『若者再考 ―自己カテゴリ化理論からの接近―』
(専修大学出版局, 2010)

大山摩希子

“最近の若者は……”という台詞を、最近よく耳にするようになった。自らを棚上げしているような観があり、私個人としてはあまり好んで使う台詞ではないが、確かに、最近の若者たちの行動は目に余るものがある。公共の場において大声で話し、ゲーム機やヘッドフォンからは騒音を撒き散らし、始終イライラとしてキレやすく、敬語の使い方すら知らない。果ては、どこにでも座り込み、通り行く人を挑むような視線で睨みつける……挙げ始めるとキリがない。

人は心の奥底に、ドロドロとしたマグマの如く欲望を抱いて生きていられると言われる。一般的な大人は成熟した理性を作動させて、現実社会に適した形で自らの欲求を表現することができるが、青年期は、年齢とともに膨れ上がる欲望に理性の発達が追いつかず、心のバランスを崩しやすい状態にある。若者たちの理由のないイライラや反抗的態度、あるいは、若者の行動が時として非社会性を帯びるのはこのためであると言われる。この時期を“疾風怒濤の時代”と評した研究者もおり、この時期の混乱と激しさを伝えている。若者のこのような混乱状態を、世間の大人たちは、人が成熟に向かう過程において発症する“麻疹”のごとく捉え、彼らが“脱若者”を迎える日をただ息を潜めて見守ってきた。

しかし、もし、このような若者特有の行動を科学的に解明できるとすれば、どうであろうか。若者が徒党を組んで行う“迷惑行動”が、必ずしも発達の未熟さから発せられるものではなく、彼らが社会的アイデンティティを獲得し、人としてステップアップしていく上で重要な意味を持つものとしたら、どうであろうか。加えて、若者に特有と思われてきた非社会的行動が、その時期に限定される一過性のものでなく、我々大人にも該当し得るものであるとしたらどうであろうか。今まで

若者に対して抱いてきた考えや意識を偏見と認め、若者に向けてきた非難の眼差しを改めようとするのではないだろうか。少なくとも私は、自らの意識改革の必要性を感じるはずである。本書の著者である大和田氏（以後、著者と称させていただきます）の目的は、まさにここ――一般の人たちの意識改革――にあるのだ。

発達とは本来、連続的な変化の過程である。しかし、発達の速度や様相が時期により異なることから、類似する特徴を有する期間を区切り“段階”としたのが、エリクソンなどが提唱した発達段階説である。これにより、人の一生において“乳児期”や“幼児期”、そして“青年期”などの区分が設けられるに至った。この発達段階説によって、人の心の発達が概括的に捉えられるようになったことは間違いない。しかし、その一方で、段階を一つずつ完了することが前提とされる段階説特有の“縛り”が、むしろ、人の発達のリアリティを低減させるというジレンマを生み出している。つまり、段階説では説明できない事象が報告され、現実とのズレが生じ始めたのである。例えば、“青年期”で一旦アイデンティティを獲得した者が、その後再び混乱状態に陥ることは珍しいことではない。あるいは、達成される発達課題の順序には、男性と女性とでは異なるという性差もみられるという。つまり、誰しもが、エリクソンの描くライフサイクルを辿るわけではないようである。

著者もまた、エリクソンの発達段階説に疑問を呈する一人である。しかし、著者の関心は、従来のような発達段階の順序性ではなく、むしろ、段階という枠に囚われない、柔軟な発達モデルの構築にある。つまり、若者を“青年期”という区分に押し込めるのではなく、若者カテゴリを社会のカテゴリの一つとして捉え、世代を超えた相互理解を目指していると言ってよいであろう。これにより、よりリアルで、生々しい青年像を知ることができよう。

さて、ここでは、本書の要となる章を中心に概要を説

明したい。まず、第1章では、若者特有の行動を自己カテゴリおよび社会的アイデンティティ形成に関する理論に照らし合わせ、新たな枠組みの想定が試みられている。これについて著者は、①若者が、若者とは知覚しないようなカテゴリとの比較を通し、自らを若者カテゴリに近づけていく過程が存在する。②この過程は、若者がいわば“非若者カテゴリ”では用いられないことがないような彼らに独自の行動をとることにより、カテゴリ間との間にある差異性を最大化させ、同時にカテゴリ内の差異性を最小化させながら、彼らに特有のカテゴリへの同化を高めていく過程である。③そして、カテゴリ間の差異性を最大化することによる自己高揚を通して、若者は肯定的な社会的アイデンティティの確立へと導かれると予測できる。(本文より抜粋)”と述べ、以降の章をこの枠組の証明に充てている。従って、著者のこの構想については、本書の各章の内容を紹介する過程において説明を加えたいと思う。

著者の仮説に沿うなら、まず、カテゴリへの同化欲求(動因)が若者側に存在することが大前提となる。若者が集団に対して“仲間に入りたい”と思わなければ、若者集団は彼らにとって誘因にはなり得ず、同化は成立しない。そして、彼らが“若者カテゴリ”に同化していく過程において(あるいは、同化した証として)、若者行動の発動が確認されなければならない。加えて、たとえその行動が非社会的要素を帯びるものであったとしても、自らに対して肯定的な評価が下される必要がある。何故なら、自己への肯定的評価なしに、社会的・個人的アイデンティティ形成はなし得ないからである。これらのポイントが“若者行動”を介して説明できることが、著者のモデルを証明する上で必要となる。しかし、抽出された若者行動は多岐にわたる(第2章および第3章参照)こともあり、集約することは容易ではなからう。そこで、著者は一人称に目をつけたのである。

著者はかねてより、日本語における“一人称の使い分け”に着目してきた。つまり、一人の人間が、自らを“僕”や“俺”などと呼び分けるのは、単なることばの違いではなく、それぞれの帰属集団に応じた“自分らしさ”の変化の現れであると考えたのである。確かに、私自身が自らを“私”と呼ぶのは職場や友人間が主であり、家庭においては“ママ”に変わり、子どもの友人に対しては“おばちゃん”と呼び変えている。これは、一人称の使い方が、個々人の社会的アイデンティティを反映していることに他ならない。従って、若者の一人称の使い方の様相

は、そのカテゴリから発動される特有の行動を反映していると考えても矛盾はなからう。つまり、若者行動のメカニズムを把握する上で一人称を介する(つまり、一人称の使い方を指標とする)という著者の発想は、極めて妥当であると言える。

まず、第4章から、“若者特有の行動は、若者カテゴリへの同化やそうしたカテゴリにおける社会的アイデンティティ確立のために必要となる機能を内包する(本文より抜粋)”ことが明らかとなった。つまり、若者が若者カテゴリに同化し、成員らしさ(つまりは、“若者らしさ”)を手に入れる過程において発現される行動は、そのカテゴリにおいてシンボリックな要素を含むものであり、それが若者特有の行動の正体ということにならう。続く第5章においては、カテゴリへの同一視の程度が高いほど、一人称への愛着が高いことが確認されたことから、若者の“自分はこの集団の一員なのだ”という思いの強さが、自らの行動の肯定的評価につながることが示された。加えて、第6章では、“若者カテゴリ”をそれとして認識(本文では、“知覚”と表現されている)することが、同化を誘発することが示され、若者側の動因が確認された。

これらの結果を統括すると、“若者たちは自らを若者カテゴリに向かわせ、集団への高い同一視が成員間の差異を小さくする方向に作用し、結果として、若者にカテゴリ特有の行動を取らせることになる”ことが見て取れる。そして、同化の過程において自尊心が芽生え、社会的・個人的アイデンティティが模索されていくのであろう。若者の迷惑行動を生み出す背景に彼らの自尊心の芽生えがあるという事実は、極めて興味深い。いずれにしても、これらの見解は、著者の想定した枠組みに沿うものであり、著者の仮説はほぼ検証されたものと考えられる。

本書の面白さは、若者行動のメカニズムの解明にあるが、同時に、広い年齢層を巻き込んだ共通の心理機制作の提案にもある。若者を発達途中の未熟者と捉え、彼らの行動はその未熟さから発動されていると考えていた私にとって、本書の内容はまさに“目からウロコが落ちる”ものであった。著者は本書の最初で、“若者とそれ以外の人との間にみるような行動上の特徴を、発達段階によって異なる複数の心理規制で説明せずとも、社会的カテゴリという概念のみを用いることによって理解可能となる(本文より抜粋)”と述べているが、少し飛躍的解釈が許されるのであれば、一般的に“大人”と称される年

齢の人たちが引き起こす行為が、必ずしも模範的ではないことも納得できる。つまり、大人たちの集団が電車などの公共の場において大声で談笑するのは、単なるマナー意識の低下ではなく、彼らの同化願望の現れなのかもしれないということである。

最後に、改めて明示するまでもないが、本書は、緻密な計画と丁寧なデータ分析に支えられた心理学の専門書である。複数の実験データが相互に整合性を保ちつつ、一つの方向に集約されていく様は見事である。心理学を学ぶ学生にとって、科学的アプローチを知る上で最適な教科書となるであろう。しかし、できることなら、本書が少しでも多くの一般の人たちの目にも触れ、私のような“目からウロコ”を落とす仲間の増えることを願っている。

